

最後まで臨也に言わせず、かぶせるようにして言葉を帝人も紡ぐ。

「絶縁は誰ともしません。距離も置きません。同居、も無理です」

同棲、ではなく同居、と強調して告げると臨也は顔をしかめた。

「なんで同棲が無理なのかな」

そして同棲、と繰り返す。同居ではダメらしい。

「学校遠くなりますし、このアパートに愛着もありますし」

何より、一緒に住んだら毎日学校に行けなくなりそうな気がする。あまりにも熱心に求められると、歩けないほどに疲労するのが目に見えている。それはかなり、ものすごく、どうしようもなく困る。

「でも、翌日学校が休みの時は、泊まっても良いです」

今までは彼のマンションに泊まったことはほとんどない。失神したときくらいだ。だからこれは一応、帝人にとつては譲歩と言うことになる。

「帝人君さ、俺のこと好きだよな？」

確認するように問われ、半ば諦観の境地で頷いた。

「好きですよ」

そして、深くため息をついた。

「すごく、好きなんです。だから浮気はしないで欲しいです。誰かと絶縁は嫌ですけど、たまに泊まるとか、家事をするとか、仕事を手伝うとか、僕にできることならします」

「……毎週」

声はひどく小さく、聞き取りにくかった。思わず問い返す。

「え？」

「泊まるのは毎週。これ以上は折れない」

無然とした表情で告げられ、思わず苦笑する。

「浮気もしないですか？」

「どうしても嫌だつて言うなら、考えても良いよ」

「どうしても嫌です。それでも浮気するなら僕もします」それが脅し文句になるとも思えなかったが、なんとなくそう言ってみると、臨也の形相が変わった。

「誰と浮気する気？」

目が本気だ。これは本気で怒っている。間違はなく嫉妬している。そんな相手など存在しないというのに。冷静に考えればそんなこと、すぐにわかるだろうに。

（この人、やっぱり僕のこと好きな気がする）

——自分の感情が五里霧中なあたり、帝人君と臨也はちよつと似てるかもしれないね。

いつだったか、新羅が告げた言葉を思い出す。あれはつまり、お互い恋していて、けれど自分の気持ちに気づいていないと、そう揶揄していたのではなからうか。そう思うと合点がいった。

「臨也さんがしないなら、僕も浮気なんてしませんよ」

目を見て微笑みかけるときゆう、と強く抱きしめられた。

「ちよ、苦しいですっ」

「君つてすごい面倒な子だね。この俺を振り回してるし」